

文

化

私は、解体社という劇団を主宰している。このほどクロアチアの首都ザグレブで開催された演劇祭、ユーロカスフェスティバルに招かれ、そこで「TOKYO GHEITO」という作品を上演し、また前後してザグレブ近郊の町を巡演してきた。

私、解体社という劇団を主宰している。このほどクロアチアの首都ザグレブで開催された演劇祭、ユーロカスフェスティバルに招かれ、そこで「TOKYO GHEITO」という作品を上演し、また前後してザグレブ近郊の町を巡演してきた。

祭への参加を要請した。「ポスト・メインストリーム」。俳優の身体をビジュアルアーツ(視覚芸術)の美学から救出せねばならない。彼女は簡潔にこのフェスティバルの性格を語った。「それは魅惑的なイメージで観客を誘惑したりしない。制度や構造といったイメージに先行するものを問題にする」。このことは私たちが作品を通して問うてきた、つねに、すでに(何かに)さらされてしまっているこの時代の身体のアクチュアリティという部分と共振している。私は演劇祭の参加に同意した。

のためにザグレブを訪れた。二人で町を散策する。旧ユーゴスラビア内戦の「戦後」、この町に「異人種」は存在しない。おそらく私たち二人だけだっただろう。牧歌的平穏と感性の停滞を感じながら私たちは記者会見場の階段をおりた。するとどうだ。会見場では世界各地から劇作家、演出家、批評家が集い、熱いメッセージを交換している。

「反戦」をテーマにさて仕事だ。造りは小さいのだがゆつたりとしたロビーと二階席を持つプロセニアム形式の路地裏劇場「シスター・ケレンプ」。公演に向けて、照明の種類、台数、音響システム、楽屋回り、舞台の機構など、限られた時間の中ですべての情報を正確に把握していかねばならない。

話題は映画に移り、舞台監督は東京で見てきた「アンダーグラウンド」について触れた。すると劇場側スタッフの笑い声は消えてしまった。「俺たちは旧ユーゴのことなど思いたしたくもない」。

このシーンは東京公演でも物議をかもし、セックスレス時代の愛の交歓などさまざまなに評された。だが、私は端的に暴力の表象といいたい。視線、言説、医療、私たちの身体はいま、ありとあらゆる暴力にさらされている。身体は戦場なのだ。その事実を演劇表象にふりむけること。

終演後、ゴルダナ女史から、来年から英ウエールズで新しく始める企画「イコノクラティカル・シアター」に参画しないかとの申し出を受けた。演劇表象をめぐる保守性を乗り越え、従来の美学から解放しようとする試みに、私は共感している。(しみず・しんじん)

現代演劇 世界と対話求め

◇クロアチアの演劇祭で従来の美学「解体」◇

清水 信臣



内戦後の町を散策 公演の一カ月前、私は劇団の舞台監督と劇場の下見

ではないか。私は緊張しながらも安堵(あんど)する。異種混交の演劇の現場はいつもこうであってほしい。

「やあ、随分と早くやってきたね」と問われ、「いや、僕らの作劇は半分を現地で作る。場所の特性を生かしながらね」。皆は大き

初日、冒頭のシーンが罵声(ぼせい)と怒号で迎えられた。俳優を舞台から引きずり降ろそうとする観客が出現するにいたり場内は騒然となる。冒頭のシーンとは、俳優が女優の背中と

いや、私たちの演劇はオリエンタリズムに与(くみ)まない。私たちは対話を望んだのだ。憎悪を媒介にし、タブー抜き、真に対等な対話を。

ばならない。そのためには、なによりもまず劇場側スタッフたちと親しくなること。我が劇団の舞台監督は若い優秀な男だ。軽妙な話術で彼らを笑わせながら、必要な情報を聞き出しノートに控えていく。談笑の中で、これからともに仕事をする喜びを異国の人たちと分かち合える。こんな時間は飛び切り楽しい。必要な情報交換も終えてしばしの世間話。

私たちの彼らとの間に、つらい壁が立ちわだかる。芸術が国境をこえるなどということは、口で言うほど生易しいものではない。ましてや、コンテクストレス(無文脈)な日本の現代演劇が、一体、いかなる方法で。私はこのとき、ここで「反戦」をテーマにした作品「TOKYO GHEITO」を上演することを決めた。

私は思い出す。あのベルリンの壁の崩壊した年、ある外国のプロデューサーに聞かされた話を。「我々が君たちに求めているのはアジア的優しさをもった演劇なんだ」。アジアは、日本は優しいのだろうか。

再び秩序を取り戻す。私は思い出す。あのベルリンの壁の崩壊した年、ある外国のプロデューサーに聞かされた話を。「我々が君たちに求めているのはアジア的優しさをもった演劇なんだ」。アジアは、日本は優しいのだろうか。

劇団解体社主宰